

さん でん じ あと 山 田 寺 跡

(国指定重要文化財 山田寺塔心礎納置銅壺一合
附 塔心礎 一箇)
(県指定史跡 山田寺跡及び礎石)

発行 各務原市教育委員会文化課
〒504 岐阜県各務原市那加桜町1-69
TEL(0583)83-1111(代)
平成5年3月30日



山田寺塔心礎納置銅壺(佐波理製有蓋鏡)
さ は り せいゆうがいわん

舍利容器として用いられたもので、舍利とは仏教を開いた仏陀や聖者の遺骨のことを言います。仏教寺院においては、本来塔が重要な意味を持っており、その塔の中心となる礎石に穴を穿ち（舍利孔）舍利を納めたのです。しかし、実際には必ずしも舍利を納めた訳ではなく、それに代わる貴金属や宝石類が納められる場合もありました。この有蓋鏡からも、明治時代に出土した際に金銭10文が納められていたとの伝承があります。

佐波理とは、胡銅器・響銅とも表し、銅を主として錫・鉛あるいは銀を混ぜた合金のことです。鮮やかな金色に発色し、製作されてから千年以上経た今でも、当時の輝きを失っていません。

蓋は宝珠形つまみを付け、それを取り巻くつまみ座は2重の段となっています。鏡の口縁部には二重の細い圈線がめぐらされ、器壁の薄さと共に当時の優れた金工技術を物語っています。全高は13.4cm、鏡の口縁部直径は10.3cmあります。製作年代は明らかではありませんが、山田寺跡が7世紀後半に建立されているので、それ以前の7世紀前半に作られたと考えられます。

各務原の古代寺院

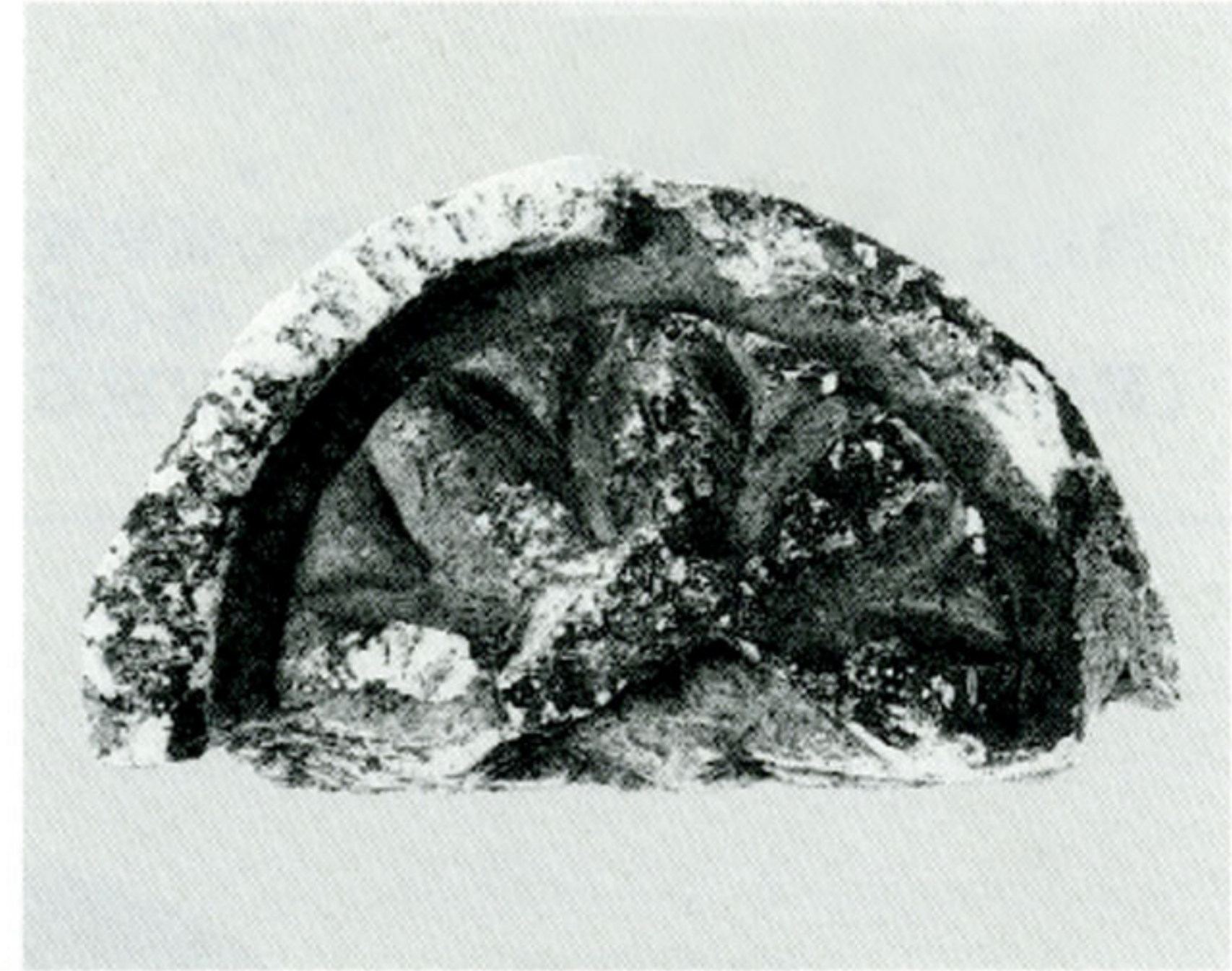
山田寺跡は、各務原市蘇原寺島町地内に所在する古代の寺院跡で、およそ今から1300年ほど前の7世紀後半（白鳳時代）に建てられました。

各務原市内には、こうした古代寺院の遺跡が6か所知られていますが、そのうち、各務地区に所在する各務廢寺以外の5か所が、ここ蘇原地区に所在しています。これらの寺院跡の位置関係については、山田寺跡の北方約500mに伊吹廢寺、東方約600mに平藏寺跡、南方約1kmに野口廢寺、そして、同じく南方約1.5kmには長者屋敷廢寺が所在しています。

仏教の伝来と広まり

日本に仏教が伝わったのは、いまから1400年余り前の538年のことで、当時の朝鮮半島にあった百濟国からとされています。その後、588年には、同じく百濟国から僧や寺工・鑪盤博士・瓦博士などの寺院建築に携わる専門技術者が渡来し、現在の奈良県明日香村の地に法興寺（飛鳥寺）という寺院が日本で初めて建てられました。

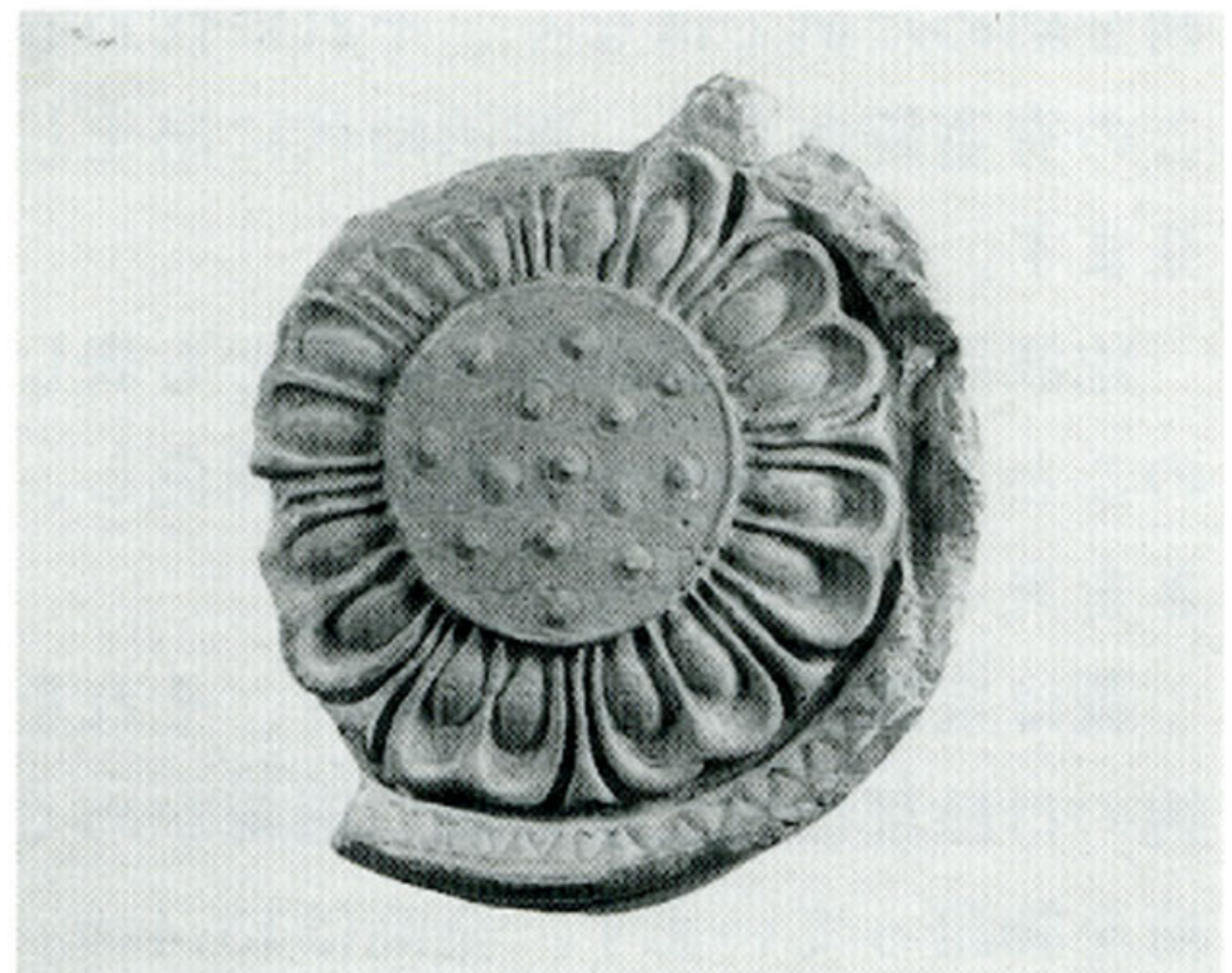
当時、仏教の日本への移入については、蘇我氏を代表とする推進派と、物部氏を代表とする守旧派との政治的な争いがあったとされ、その争いに勝利した蘇我氏によって、それからの日本は積極的な対外外交と先進文化の導入が進められました。つまり、仏教と寺院の建築は、そうした積極政策と先進文化の象徴であり、以後、日本各地の重要な地域には、こうした古代寺院が次々と建立されていったのです。



たんべんはちべんれんげものきまるがわら
単弁八弁蓮花文軒丸瓦
(推定径15cm)



さいべんじゅうにべんれんげものきまるがわら
細弁十二弁蓮花文軒丸瓦
(推定径15.4cm)



ふくべんはちべんれんげものきまるがわら
複弁八弁蓮花文軒丸瓦
(推定径17.4cm)

山田寺跡の概要

私たちの住む岐阜県には美濃と飛驒の旧国があります。そのうち美濃には33か所、飛驒には14か所の古代寺院跡が知られています。この寺院跡の分布を調べてみますと、各務原市域の6か所が最も多く、しかも、蘇原地区の径約2kmの範囲に集中する傾向が大きな特徴と言えます。

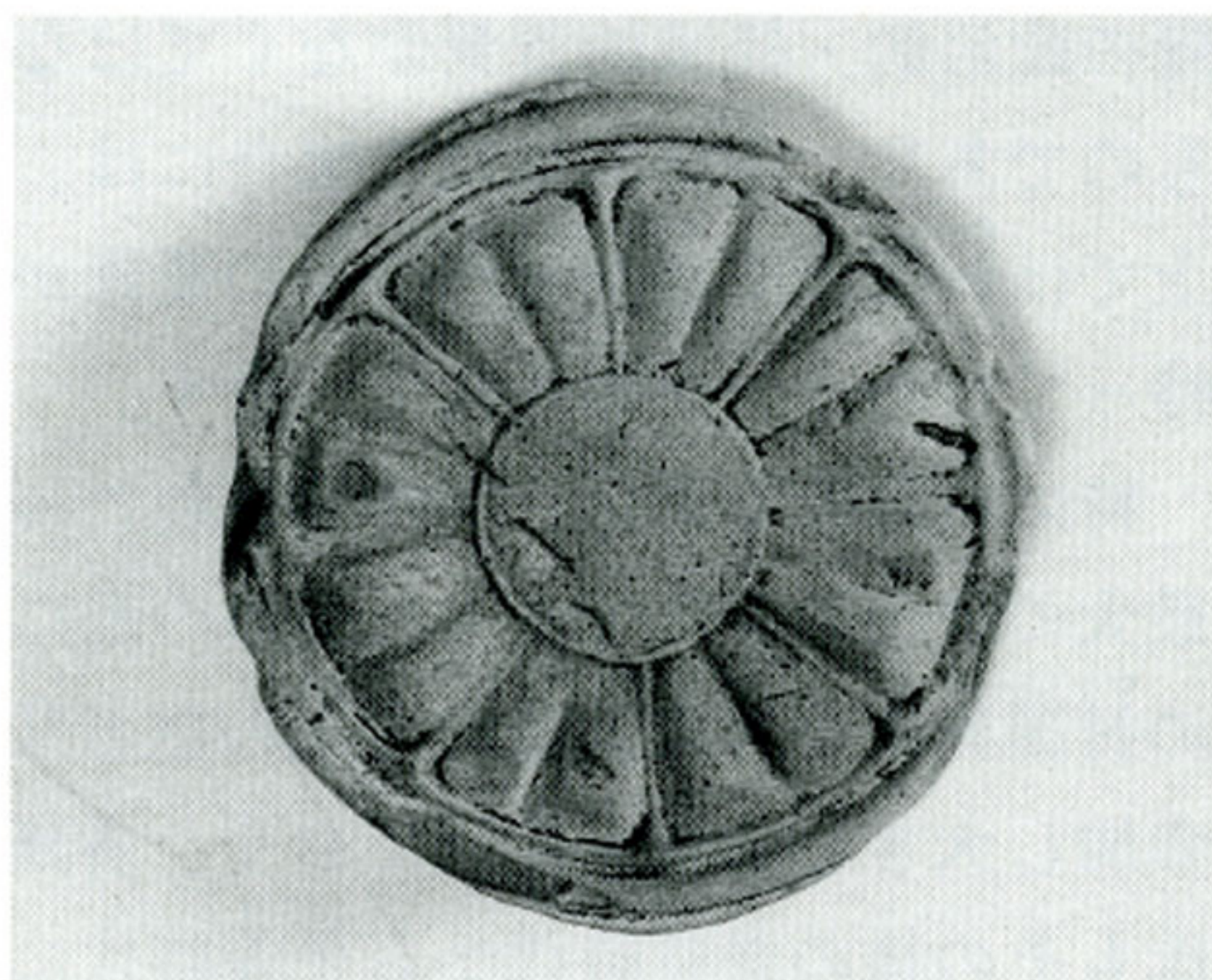
山田寺跡は平蔵寺跡と並んで、6か所の寺院跡のなかでは最も規模が大きく、有力な寺院であったことが、現地に残る礎石や瓦の分布から想定されています。しかし、平蔵寺跡については早くから宅地化が進み、その全容を明らかにすることは困難となっています。

山田寺跡は遺跡の範囲として、瓦が径約100mにわたって分布しています。明治時代にはその中心部の竹藪の開墾により塔の基壇跡が壊され、そこから塔の心礎が掘り出されるとともに、心礎の中央舍利孔からは、佐波理製の有蓋鏡が出土しました。

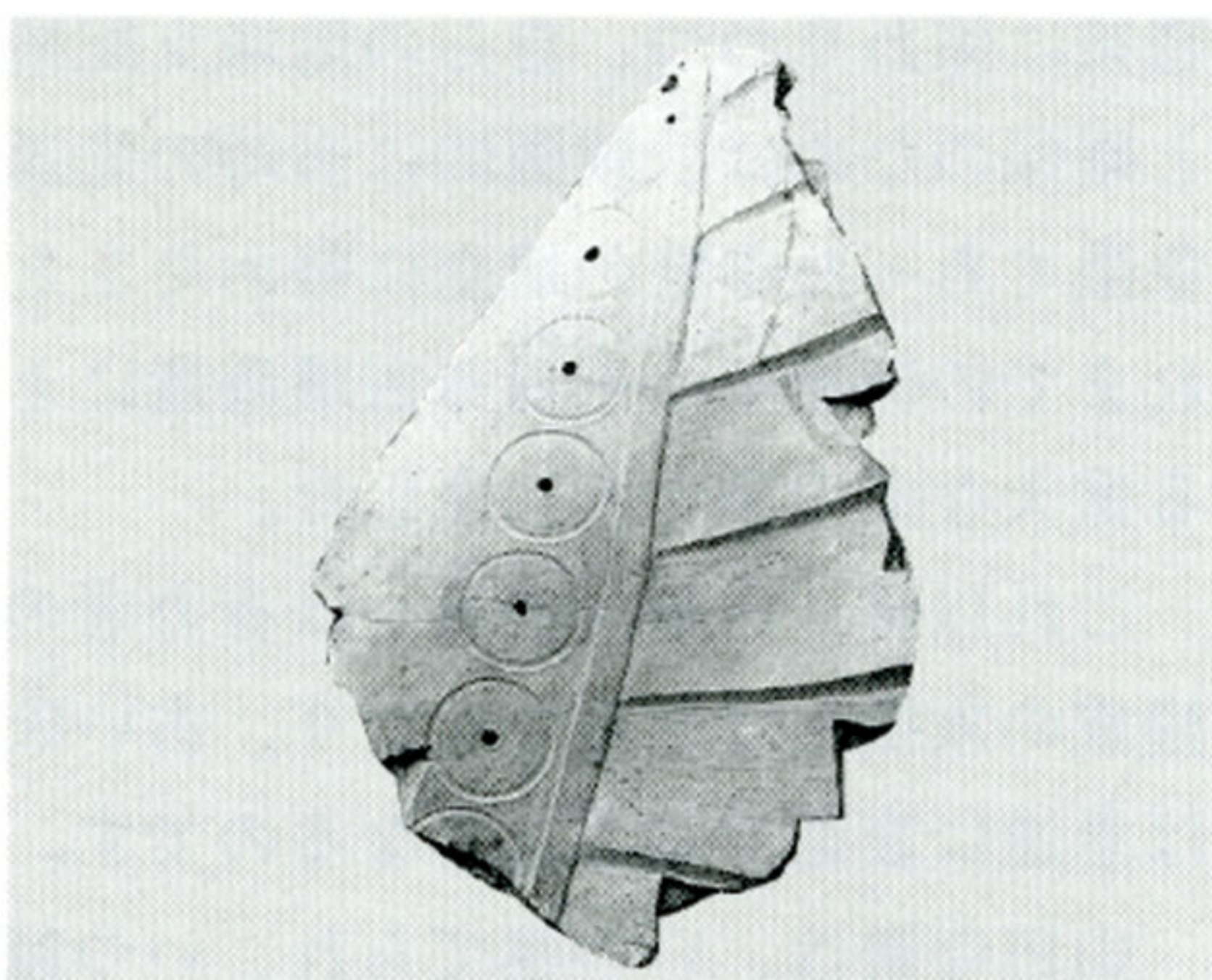
塔心礎は、現在、遺跡の東部に所在する臨濟宗無染寺の境内に置かれています。また、塔心礎が掘り出された地点の西方からは、寺院内の重要な建物の屋根を飾った鴟尾瓦の破片が発見されており、ここに金堂があった可能性が高いと考えられます。

寺院建立と在地豪族

この寺院建立の推進者は、当然ながら中央の朝廷と有力貴族であったのですが、そうした新しい政治的な動きに対して敏感に反応しつつ、自らの政治的・社会的地位の確立に努めた地方の有力な新興豪族層の動きも、無視することはできません。なぜなら、山田寺跡のような地方寺院の建立には、彼ら新興豪族



複弁八弁蓮花文軒丸瓦
(退化型式 径17.8cm)



しびがわら
鴟尾瓦
(現存長57.4cm)



とうせいひやくまんとう
陶製百万塔
(現高6.6cm)

層の政治的・経済的背景がなくてはならないものであり、各務原地域の場合には、記録の上では村国氏や各務勝氏などの豪族が勢力を持っていたことが知られています。

特に村国氏などは、同時期に起こった古代最大の政治的争乱であった壬申の乱に、一族の村国男依が天武天皇の舎人のひとりとして参加し大きな功績をあげており、各務（勝）氏もその後の奈良時代から平安時代にかけて郡司や他の地方官に任命されるなど、在地に大きな勢力を持っていたのです。

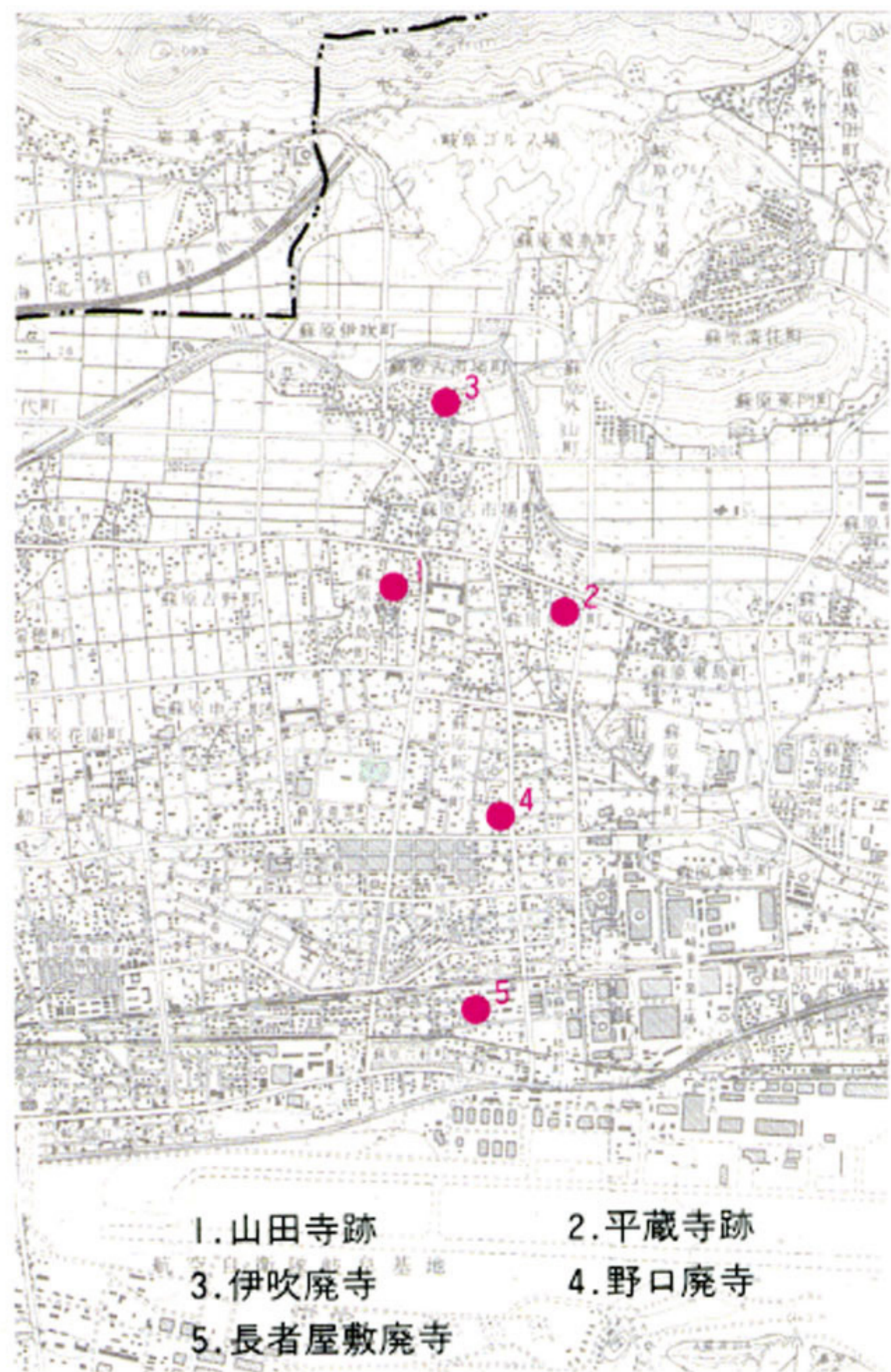
こうした地方豪族が、中央の政治的動向と密接に係わりつつ、自らの地域支配権の安定と確保のために、積極的に当時の先進文化の象徴であった寺院の建立に努めたことは、それまでの何世紀にも亘る古墳築造にとって代る重大な出来事でありました。

これ以後、古墳（墳墓）は有力者の権力や権威の象徴とはなくなり、古い氏族社会は急速に衰退することとなるのです。

山田寺跡は、いつ建てられ、いつ滅んでいったのか、その正確な年代はわかりません。ただ、建てられた年代については、出土する瓦の年代から、およそ7世紀後半の時期に想定されています。ここから出土する瓦は、建物の軒先を飾る軒丸瓦や軒平瓦に、奈良の川原寺で用いられた瓦と同じ系統に属する文様が用いられており、このことは美濃地域の古代寺院跡全体にも共通する特徴であることから、各務原地域、さらには美濃地域全体の当時における中央との強い繋がりを物語るものと言えましょう。



塔心礎
(長さ1.5×1.25m、高さ0.9m)



山田寺跡とその周辺の寺院跡

撮影協力：藤田一郎